

# 夢風便り

ゆめかぜだより

Volume

3

特集

## 輝ける碧き空の下で 遠州ブラジル移民史



遠州偉人列伝  
“湖郷”を愛した心優しき吟遊詩人  
清水みのる

ワンデイ・トリップへの誘い  
引佐町奥山

# 夢風便り

Volume 3

## Contents



ゆめかぜだより

### 3 特集

## 輝ける碧き空の下で 遠州ブラジル移民史

10

### 遠州偉人列伝

“湖郷”を愛した心優しき吟遊詩人  
清水みのる

15

### I Love Hamamatsu! 浜松大好き! セバティアーノさん

16

### ワンディ・トリップへの誘い 美しき里山の風景を探して／引佐町奥山

20

### 輝く未来人 浜松市 守屋拓海さん

22

### われら夢風カンパニー File : 05 株式会社ベストプラス File : 06 鈴木洋服店

26

### いきいき悠々倶楽部 浜松市 藤井克治さん

28

### 天浜線 人と時代をつなぐ 花のリレープロジェクト

32

### 未来に残したい遠州遺産 新宮池

令和2年6月発行(年2回発行)

発行 浜松いわた信用金庫

浜松市中区元城町114-8

053-401-1812

<https://hamamatsu-iwata.jp/>

編集・制作 株式会社メディアトーク



特集

# 輝ける碧き空の下で 遠州ブラジル移民史

明治41年(1908年)6月18日。日本からの第1回ブラジル移民を乗せた「笠戸丸」は、サンタスの港に接岸した。上陸した移民たちを指導し、開拓を成功に導いたのは、遠州生まれの一人の青年だった。時は流れ、現在。移民たちの子孫は「日系ブラジル人」として遠州の地に渡り、着実に定着している。そんな遠州とブラジルの深い縁をひも解いてみよう。

モノクロ写真:  
ジュニオール・マエダ氏







▲コーヒー豆を収穫する一家に訪れたつかの間の休息時間 [※]

耳寄りな話が寄せられた。「移民会社がブラジル行きの通訳を募集している。ブラジルの公用語はポルトガル語だが、スペイン語と同じラテン語系だから何とかなるだろう。移民船の出港は今年の春だ。」

この募集に手を挙げ、採用されたのは、運平、領昌、大野基尚、加藤順之介、仁平嵩の5人。すなわち「通訳五人衆」だ。若者たちは移民とは別に、同年3月に日本を出発。シベリア経由でイギリスまで行き、そこから船でブラジルへ渡るというコースだった。サンツス港への到着は5月3日。その約1カ月後、5人は港で「笠戸丸」の移民たちを出迎えたわけである。

そこから、5人はそれぞれ別々の耕地へと移民たちを引率して出発したが、5人の仕事は単なる通訳ではない。九州、沖縄、東北などから来た雑多な人々のリーダーとして、入植を成功に

導く使命があつた。しかし、これは学校を出たばかりの若者にはいささか荷が重い仕事であり、前途には大変な困難が待ち受けている。

まず、到着の時期が遅かった。移民たちが入植した各耕地のコーヒー農園では、収穫量は向上し、人々の生活はようやく安定していった。

やがて時は流れ、最初の入植から6年が経過した大正3年(1914年)。運平に大きな転機が訪れる。日本のブラジル領事から「日本人移民のための新しい植民地をつくってくれないか」という要請があったのだ。これを快諾した運平は、すぐさま候補地選びに走り出す。自らアマゾンの密林に分け入り、適地を探すこと1カ月。ノロエステ鉄道ペンナ駅という場所から十数キロ奥に入った、川沿いの湿地帯を新たな入植地と定めた。「ここなら米ができる。米さえあれば日本人は生きていける」

## 「平野植民地」を開拓し、日系社会発展の礎を築く

運平は、23家族、88人が入植したグアタパラ耕地という農場を担当した。ここでも入植者の生活は苦しかったが、農場の支配人に交渉して給料の前借りを認めさせたり、広い農場を馬で巡回して移民たちの仕事や生活の相談に乗ったりした。そうした真面目な仕事ぶりとリーダーシップが評価され、運平は副支配人に抜擢される。こうして運平の指導によって、グアタパラ耕地の収穫量は向上し、人々の生活はようやく安定していった。

やがて時は流れ、最初の入植から6年が経過した大正3年(1914年)。運平に大きな転機が訪れる。日本のブラジル領事から「日本人移民のための新しい植民地をつくってくれないか」という要請があったのだ。これを快諾した運平は、すぐさま候補地選びに走り出す。自らアマゾンの密林に分け入り、適地を探すこと1カ月。ノロエステ鉄道ペンナ駅という場所から十数キロ奥に入った、川沿いの湿地帯を新たな入植地と定めた。「ここなら米ができる。米さえあれば日本人は生きていける」



▲平野植民地で開かれた仮装大会 [※]



▲木から採取したコーヒー豆をざるに集め、空中に放り投げてふるいにかける [※]

と運平は考えたのだ。

新天地への移住は、翌大正4年(1915年)8月から始まる。原生林の道なき道を切り開き、猛獣オオサン(ジヤガ)の出る山中に野営して、目的地を目指した。到着後は、密林の伐採、山焼きなどをして耕地をつくる。米作に適した土地には稻を植え、コーヒー豆の作付けにも着手した。こうして開拓の進む農地は、誰もが「平野植民地」と呼ばれるようになった。

「さあ、これからが本番だ」。誰もがそう思った矢先の11月中旬、ある異変が起きた。入植者の一人が高熱を発し、寝込んでしまったのだ。12月になると十数人が熱病にかかり、バタバタと倒れた。蚊が媒介する原虫感染症、マラリアのまん延だ。この時期、南半球のアマゾンは夏であり、湿地帯では蚊が大量発生する。人々のために米作にこだわった運平の真心がかえって仇となった。年が明けても感染の勢いは衰えず、満足な治療費もない中で、おびただしい数の犠牲者が出て。それでも運平ら入植者は歯を食いしばって耐え、地獄のような夏を乗り切った。

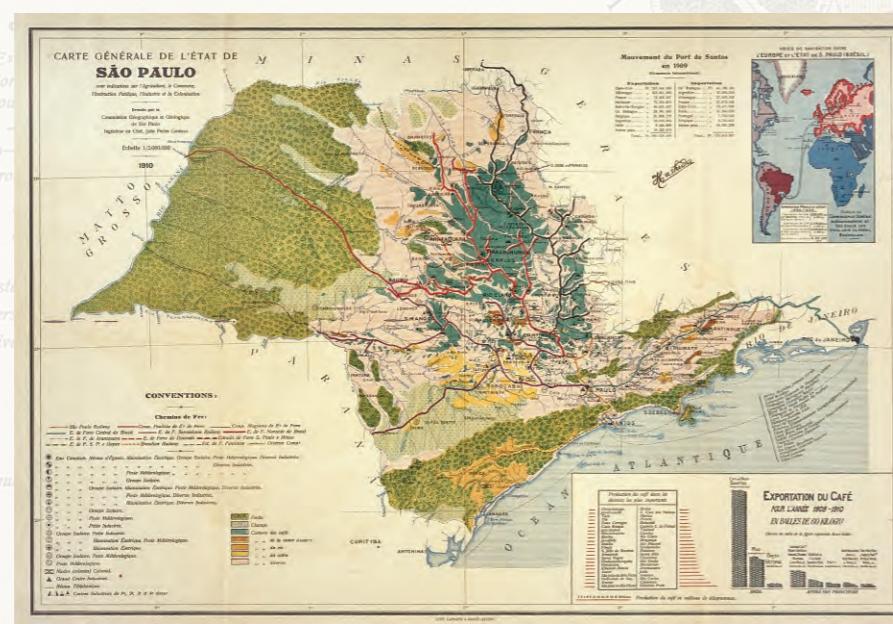
しかし、試練はさらに続く。大正6年(1917年)11月にはバッタの大群が植民地に襲来し、畑の作物を食い尽くしてしまった。さらに追い討ちをかけるように、干ばつ、霜害の被害が続

く。まさに絶望的な状況だったが、人々は川の魚を採り、森のイノシシやシカを狩って命をつなぎだ。

こうした数々の困難を乗り越え、入植地にようやく平穏な日々が訪れつつあった大正8年(1919年)。平野植民地の建設に全身全霊を傾けてきた運平を恐るべき病魔が襲う。何日も続く高熱と全身の衰弱。この頃、世界的に流行していたスペイン風邪に、運平は冒されてしまったのだ。マラリアならキニーネという特効薬があるが、当時の新型インフルエンザにはなすすべがない。周囲の懸命な看護も空しく、運平は発病からほどなくして世を去った。享年34。かけがえのないリーダーの



▲正装し、当時、高級品だった蓄音機を聞く日本人移民一家。まさに成功を象徴する光景だ [※]



▲鉄道路線や各耕地を示した当時のサンパウロ州地図 [※]

# 父祖の地へ「帰還」 ブラジルの魂を胸に

令和の時代に羽ばたく  
「ブラジル系日本人」

明治41年(1908年)の「笠戸丸」以降、多くの日本人が夢を抱いて移住したブラジルの大地。第2次大戦で一時中断したが、昭和28年(1953年)から移民は再開し、同48年(1973年)に移民船が廃止されるまで集団移住は続いた。そして平成元年(1989年)、日本の入管法改正によって全く逆の潮流が生じる。日本での就労が認められた日系ブラジル人が大挙して来日し、全国各地の製造現場などで働き始めたのだ。その中で、とりわけ多くの日系ブラジル人を引き寄せたのは、ものづくりが盛んな遠州地域だった。

「豊かになった日本でお金を稼ぎ、数年経ったら母国へ帰ろうと、日系ブラジル人たちは考えた。100年前の日本人ブラジル移民と同じ“デカセギ”的

精神ですね。私の場合は日本で空手を学びたいと考えていたので、目的は少し違うのですが」。浜松市中区で空手道場「世界武士道空手連盟魂誠會」を主宰し、日伯交流協会の副会長も務める児玉哲義館長はこう語る。

児玉館長は昭和40年(1965年)、サンパウロ生まれの日系二世。両親は戦後間もない頃にブラジルへ移住した日本人で、幼い頃から日本語や日本食に慣れ親しんできた。また、14歳の時からブラジルで沖縄出身の空手家に師事し、武道の精神を叩き込まれている。「そのおかげで、平成2年(1990年)に浜松へ来てすぐの頃、日本語能力試験の1級に一発で合格。普通2種免許も取得することができました。その後は、浜松でタクシー運転手をしながら、空手修業を続けたんです」。

児玉館長も、当初は日本で空手の経験を積んだ後、ブラジルに帰って道場を開く予定だった。しかし、ともに来日した二人の子どもたちから「日本に残りたい」と懇願され、浜松永住を決めたという。「子どもたちは日本の学校になじんでいるし、幼い頃に離れたブラジルのことはよくわからない。その気持ちを優先し、日本で空手の道を究めようと決心したんです」。

そしてもう一つ、児玉館長が永住を決めた理由がある。それは「日本語をうまく話せない日系ブラジル人と、その子どもたちをサポートしたい」という思いだった。言葉ができない地域社会になじめず、孤立感を深める。そのため若者たちが集団で夜の繁華街にたむろし、非行に走るケースもあった。そこで、児玉館長は平成18年(2006年)から街中で「夜回り」を行い、日系ブラジル人の若者を善導するよう務めた。平成23年(2011年)の東日本大震災をきっかけに、浜松のブラジル人が大幅に減少するまで、夜回



▲「魂誠會」道場で子どもたちを指導する児玉館長



▲「ブラジル系日本人」の愛弟子とともに。左が河野武君(中3)、中央が石井ゆうじ君(小6)

り活動を続けたという。

「浜松にはピーク時で約1万9000人の日系ブラジル人が住んでいましたが、現在は約1万人とほぼ半減しています。しかし、この1万人はしっかりとした意識をもって定住を選んだ人たち。もはや“デカセギ”ではありません。その子どもたちも日本生まれ、日本育ちが多く、地域社会に溶け込んでいます。その上で自分たちのルーツも大切にする『ブラジル系日本人』だといえるでしょう」

現在、「魂誠會」では50人ほどの生徒を指導し、その中に日系ブラジル人の子どもたちも少なくない。「子どもたちには、空手を通して日本精神を養い、学校でもしっかり勉強して大学進学まで目指してほしいと願っています。それによって、ブラジルルーツの人が普通に活躍し、地域社会に貢献できる世の中になっていけばうれしいですね」と、児玉館長は話している。

### 日系人の過去と現在をモノクロ写真で描写

さて、ここでもう一人、この地域で活躍する日系ブラジル人を紹介しよう。写真家のジュニオール・マエダさんだ。マエダさんは平成2年(1990年)、父や叔父とともに15歳で来日。日本語を学びながら千葉県の自動車部品工場で働き、その後は東京で写真家として活動。2011年には、東日本大震災の被災地で撮影した写真で「世界の写真大賞」を受賞。現在は、主に海外の歴史的建造物や文化遺産の撮影を行っている。

マエダさんのカメラは、日系ブラジル人の様々な姿をとらえる。慣れない機械操作を懸命に習う姿、故郷に残した家族に手紙を書く姿、国際電話を掛けるため電話ボックスに長い行列をつくる姿。まだネットも携帯電話も普及していないかった時代、日系ブラジル人たちが何を思い、何を心のよりどころにしていたかをマエダさんの写真は克明に描いている。

そして、30年後の現代の写真。そこに映し出されているのは、浜松市天竜区山東、気田川の東にそびえる標高539メートルの光明山。かつて光明寺という寺院が築かれていた遺跡の一角に、一つの記念碑がひっそりとたたずんでいる。その表面に刻まれているのは「拓魂」の文字。日本ブラジル移民の恩人である平野運平の功績を称え、浜松在住の日系ブラジル人たちが建てたものだ。運平ゆかりの地に建つ碑は、日本とブラジルの絆の象徴として、これからも地域を見守り続けていくだろう。



▲日系ブラジル人の過去と現在を写した写真パネルの前に建つジュニオール・マエダさん



▲光明山遺跡の一角に建てられた平野運平の記念碑

は、日本に定着し、たくましく生きる日系ブラジル人の新しい姿だ。ある人は企業経営者、ある人はタレント・モデル、ある人は作家。また、日本で家庭を築き、持ち家を建て、子どもたちを大学などへ進学させた人も数多い。

「30年前に比べ、今は在住外国人への公的サポートが充実しているほか、ブラジル人向けのスーパーやレストランもたくさんあります。でも、それでも、先人たちが眞面目に頑張ってきたからこそ。過去の積み重ねの上に恵まれた現状があることを、若い人たちに知ってもらいたいですね」と、マエダさんは強調している。

浜松市天竜区山東、気田川の東にそびえる標高539メートルの光明山。かつて光明寺という寺院が築かれていた遺跡の一角に、一つの記念碑がひっそりとたたずんでいる。その表面に刻まれているのは「拓魂」の文字。日本ブラジル移民の恩人である平野運平の功績を称え、浜松在住の日系ブラジル人たちが建てたものだ。運平ゆかりの地に建つ碑は、日本とブラジルの絆の象徴として、これからも地域を見守り続けていくだろう。